

# 京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

2017

## <論文>

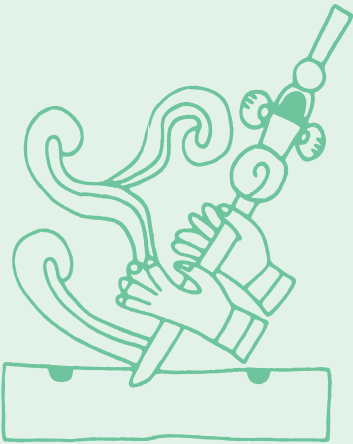
Mestizos, *niseis*, y *náufragos*:  
la continuidad de la presencia japonesa en Filipinas, 1650-1766  
..... ホセ・アンヘル・デル・バリオ・ムニョス 1

先住民行政区における自治の問題点  
—近年のチアパス高地の事例から—  
..... 小林 致 広 31

## <調査研究報告>

Positioning the Creoles within the “American-Mediterranean Regions” :  
Racial Identity and Land Demarcation in Bluefields, Nicaragua  
..... 青 木 敬 57

大西洋システムにおけるアフロ・ラテンアメリカ文化研究調査報告  
..... 住 田 育 法 75



## 〈調査研究報告〉

# 大西洋システムにおけるアフロ・ラテンアメリカ 文化研究調査報告

住 田 育 法

はじめに

第1章 大西洋黒人奴隷貿易史の展開に注目した2015年の調査

第2章 カリブ海キューバへの展開に注目した2016年の調査

第3章 2017年の調査を終えて考える研究の背景と展望

おわりに

## はじめに

2015年8月、日本から太平洋を越えて米国ヒューストン経由でニカラグアの首都マナグアに降り立ち、翌5日にはカリブ海に面したブルーフィールドに向かい、4日間滞在した。南米のアフロ文化圏ブラジルを研究対象とする立場からの大西洋システムに視野を拡大した研究の開始である。

大西洋システムにおける地政学的展開では、特に過去の大西洋圏黒人奴隷貿易に深く関わった英国やポルトガル語圏の本国ポルトガル、さらに大西洋上の黒人奴隷貿易の拠点であったアフリカのポルトガル語圏カーボベルデの4ヵ国を中心に、カリブ海諸国のキューバ、中米のニカラグアに注目した。

したがって本研究目的の第1は、大西洋黒人奴隷貿易史の展開におけるブラジルとカリブ海地域との歴史的文化的交流の枠組みを考えること、第2はアフロ・ラテンアメリカ社会の歴史的・文化的遺産の今日的価値を観察することである。

ポルトガル語圏ブラジルの民主主義と社会正義実現の政策の研究を、中道左派のルーラとディルマの労働者党政権に注目して労働者党政権期のブラジル政権研究を行ったとき、過去の黒人奴隷制度を背景とする現代ブラジルの社会格差是正のためのブラジル識字プログラム（PBA）などの政策、すなわち黒人の低所得者層の初等・中等教育充実の重要性に注目するに至った。ブラジル労働者党政権の下で成果を上げてきた条件付きの低所得者層支援のボルサ・ファミリアなどである。中道左派の労働者党政権は、新興国BRICSの1国として、隣国の南米南部共同体を率いていた。





2014年にポルトガル語圏諸国共同体（以下、CPLPと略す）にオブザーバーとして日本が参加した。CPLPは1996年に設立され、本部はリスボンに設置されている。本研究で具体的に対象とするのは、大西洋システムに関わるブラジル、カーボベルデ、そしてポルトガルが中心である。大西洋システムにおける黒人奴隷貿易史（参考一布留川他著『近代世界と奴隷制—大西洋システムの中で』1995年、人文書院）の観点から、CPLPの他に、植民地時代から現在に至る大西洋の黒人のディアスポラ研究を視野に入れて、カリブ海のキューバのハバナ大学のコロネル（Rogelio

Rodríguez Coronel) 教授たちとの共同研究も進める予定である。

## 第1章 大西洋黒人奴隷貿易史の展開に注目した2015年の調査

まず、2015年の調査日程を示しておきたい。

期間：2015年8月4日（火）～9月7日（月）

月	日	曜日	調査内容
8	4	火	<p>ニカラグア、マナグア着 南先生、辻先生、植村さん、金田さんと、Colibri ホテルで打合せ（写真1）。</p>  <p>写真1 マナグアのホテルで打ち合わせ</p>
	5	水	<p>ニカラグア、マナグアからブルーフィールズへ。空港の「混血文化」表象の絵（写真2）。</p>  <p>写真2 ブルーフィールズ空港の「混血文化」の絵</p>
	6	木	<p>ブルーフィールズ BICU 博物館訪問、資料収集。 午後、ブルーフィールズ在住日本人バレーラ・ユミコさんと情報交換。</p>
	7	金	<p>BICU 元副学長 Carroll Ray Harrison 宅訪問、情報交換。夫人はブラジル人 Angelica Crespo。</p>  <p>写真3 BICU 元副学長宅を訪問</p> <p>午後、BICU ドナルド教授訪問、情報交換。</p>  <p>写真4 BICU 訪問</p>

8	土	ブルーフィールズからマナグアへ。マナグア Colibri ホテル泊。
9	日	マナグアの Colibri ホテルで資料整理。
10	月	マナグア市内の書店で文献購入。
11	火	マナグア UNAN 人類学教室で研究交流会（写真5）。社会人類学 Gloria Argentina Lopez Alvarado 教授（人文科学部長）（写真6）。考古学研究室（写真7）。    写真5 UNAN 人類学教室で研究交流会 写真6 研究室訪問 写真7 考古学研究室
12	水	マナグア出発，パナマ経由でリオデジャネイロ（以下，リオと略す）へ移動。
13	木	リオ空港到着，UFF 元学長ロベルト・サーレス教授が出迎え，ニテロイのニーマイヤー記念館訪問（写真8）。午後 UFF 学長執務室訪問，ノブレガ（Antônio Claudio Lucas da Nóbrega）副学長，文学部教授リヴィア・レイス国際交流部長と面談（写真9）。夜，UFF 元学長イルジベルト・カヴァルカンティ教授宅訪問。   写真8 ニーマイヤー記念館訪問 写真9 UFF 副学長と面談
14	金	ニテロイのホテル Petit Village Icarai で情報整理。
15	土	UFF ニレウ・カヴァルカンティ教授のリオのお宅訪問，情報交換。リオの土曜市を調査。
16	日	早朝より，ヴァルガス財団研究員カイゾー・イワカミ・ベルトラン教授，IBGE 研究員ソノエ氏らとリオの自然林，調査。午後，シャカラ・ド・セウ博物館，カストロ・マヤ博物館，リオ中央郵便局のブラジル地方文化展などを鑑賞。
17	月	UFF 派遣留学生平田君と小林さんを激励。
18	火	ブラジル文学アカデミー会員ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス UFF 名誉教授並びにドミーシオ・プロエンサ UFF 名誉教授とリオで情報交換。
19	水	UFF 文学部マルレーネ名誉教授，リヴィア・レイス教授と情報交換。
20	木	UFF バイオマス水管理研究センターライムンド・ダマセノ教授，訪問。UFF 元学長イルジベルト・カヴァルカンティ教授同行。
21	金	UFF 文学部 41 年前留学時の指導教授マキシミアノ・シルヴァ名誉教授宅を訪問。
22	土	リオデジャネイロ国立図書館特別展鑑賞。
23	日	ニテロイのホテル Petit Village Icarai で情報整理。
24	月	リオで文献購入。UFF ジョアン・ルイス教授，アイーダ・マルケス教授とリオのコロンボで情報交換。
25	火	昼，UFF 元学長イルジベルト・カヴァルカンティ教授ご夫妻と情報交換。
26	水	リオからポルトガルのポルトへ移動。
27	木	ポルトに到着。コインブラへ移動。コインブラ大学南蛮文化研究者イネスご夫妻と交流。
28	金	コインブラ大学文学部ルイス・トルガル教授ご夫妻とパン博物館鑑賞，エストレラ登山。
29	土	コインブラの宿泊ホテル Bragança で情報整理。

	30	日	コインブラからポルトへ移動。
	31	月	ポルトのホテルで情報整理。
9	1	火	ポルトからリスボンへ移動。
	2	水	リスボン、日本大使公邸で東博史大使閣下訪問。
	3	木	カモニス院総裁アナ・パウラ・ラボリーニョ、コル・デ・カルヴァーリョ元本学教授とリスボン地理学協会へ情報交換。夜、日本大使館佐野浩明参事官ご夫妻と情報交換。
	4	金	リスボンのホテルで情報整理。
	5	土	リスボンからフランクフルトへ移動。
	6	日	フランクフルトから日本へ移動。
	7	月	帰国。

すでに述べたように、2015年8月5日から8日までの4日間、カリブ海に面したブルーフィールドズに滞在した。滞在中幸いにも、現地の Bluefields Indian & Caribbean University 元副学長である英国系地主の子孫の研究者 Carroll Ray Harrison 氏とブラジル南部出身の彼の夫人 Angélica Crespo 女史 (写真 10) と親しくなり、調査の助けとなった。



写真 10 BICU 元副学長とブラジル南部出身の夫人

ご子息がヨーロッパで生活する夫妻はともに白人であるが、街中の住民の人種は多くが黒人系である (写真 11, 12)。



写真 11



写真 12 道端でくつろぐ黒人たち

先住民を含む6つの民族の友好を表した街中の彫像の黒人の生業は漁労であり、過去この地には、ブラジルのような黒人奴隷制度は存在していなかったことが理解できる。くだんの夫妻の説明のよると逃亡奴隷や難破した奴隷船から逃れた者、さらには海賊所有の奴隷であった。ブラジルのアフロ音楽のサンバを連想させる踊りや祭りがブルーフィールズに存在する。人類学専攻の現地の研究者や学生の協力を得て、書物や記録文書なども利用するフィールド調査が可能である。

大西洋システムの形成過程に目を転じると、小王国ポルトガルの植民地であったブラジルは、ヨーロッパの帝国主義活動が高まる中、19世紀に至るまで、強国イギリスへの経済的従属を選択することになる（金七 2000, 39-53）。

ニカラグアを見ると、1780年には、イギリスの若きネルソン提督が、エル・カステージョを攻撃して、敗れている。ニカラグアでは、このとき彼は、右目を失明したと伝えられている。なお、カリブ海側のブルーフィールズと、コスタリカ国境近くのグレイタウンは、1740年に建設された。それ以来、19世紀後半まで、カリブ海側は、イギリスの強い影響下にあった。ニカラグアの黒人はこの展開において導入されたのである（加賀美 2009, 20-21）。


## 第2章 カリブ海キューバへの展開に注目した2016年の調査

第1章と同じく、まず調査の日程を示しておきたい。

期間：2016年8月9日（火）～9月6日（火）

月	日	曜日	調査内容
8	9	火	コインブラ大学教授との情報交換。
	10	水	同上
	11	木	コインブラ大学博物館観察。
	12	金	コインブラ大学日本研究者との情報交換。
	13	土	ユネスコ文化遺産都市コインブラ調査。
	14	日	同上
	15	月	コインブラ大学トルガル教授との情報交換。
	16	火	歴史都市ポルトの博物館。
	17	水	コインブラからリスボンへ移動 日本大使東閣下と情報交換。
	18	木	カモンイス院ラボリーニョ院長と情報交換。
	19	金	日本大使館佐野書記官と情報交換。
	20	土	海軍博物館で大航海時代調査。
	21	日	飾りタイル（アズレージョ）博物館でポルトガル文化の調査 ブラジルへ移動。
	22	月	リオのフルミネンセ連邦大学職員と情報交換。空港に出迎えを受ける。
	23	火	リオのオリンピック関連施設調査。
	24	水	リオのフルミネンセ連邦大学教授と情報交換。シドニー学長、クラウディオ副学長、リヴィア文学部交流部長。午後、文学部教授と面談。
	25	木	ニテロイの近代美術館 MAC で民族文化の調査。
	26	金	フルミネンセ連邦大学ドミーシオ・プロエンサ教授の案内でブラジル文学アカデミーとの学術交流。ネルソン映画監督と情報交換。
	27	土	リオのフルミネンセ連邦大学ニレウ教授たちと情報交換。



	28	日	ヴァルガス財団カイザー教授たちと情報交換。リオ美術館で調査。
	29	月	キリスト教系擁護学校を訪問し障害者教育の実情を調査。
	30	火	フルミネンセ連邦大学教授と情報交換。
	31	水	リオからキューバへの移動に備えて情報整理。
9	1	木	リオからキューバのハバマへの移動。
	2	金	ハバマ旧市街の観察。
	3	土	同上
	4	日	ハバナ要塞博物館で調査。
	5	月	ハバナ大学ロドリゲス教授と情報交換。 
			写真 13 ハバナ大学教授宅訪問
	6	火	キューバを発ち帰国の途に。
	7	水	帰国の途に。
	8	木	帰国。

2017年は、CPLP主要国の教育政策比較研究を試みた。ブラジルは新興諸国 BRICS の一員として、女性大統領デイルマ・ルセフ政権の教育重視並びに全方位外交が注目されていたが、ブラジルの政権が中道左派から中道右派に代わる転換期を迎えた。中道右派の副大統領が正式に大統領に就任した。今回、現地においてその実情を観察することができた。

さらに、ポルトガル語教育を基盤とする民族国家形成過程におけるポルトガルとブラジルの共通項と差異を考察した。ブラジルでは、フルミネンセ連邦大学の教授たちの協力を得ることができた。特に、ニレウ・カヴァルカンティ教授やネルソン・ベレイラ・ドス・サントス名誉教授に会い、さらに元学長カヴァルカンティ教授を訪問し、研究について打ちあわせた。同大学ドミーシオ・プロエンサ教授の案内でブラジル文学アカデミーとの学術交流を行うことができた。同大学シドニー学長、クラウディオ副学長、リヴィア文学部交流部長とも情報交換を行った。ブラジルのルーツを成すポルトガルでは、コインブラ大学文学部長パイヴァ教授、トルガル教授と研究情報を交換した。リスボンでは日本大使館東大使やカモンイス院のラボニーニョ院長に面談を行った。

2016年は特別に、アフロ・ラテンアメリカ研究の視座から、カリブ海のキューバ共和国の黒人文化の実情の調査を実施した。ハバナ大学文学部ロドリゲス教授に会い、このテーマについて理解を深めることができた。

### 第3章 2017年の調査を終えて考える研究の背景と展望

ここでもまず、調査の日程を示しておきたい。

期間：2017年8月5日（土）～9月5日（火）

月	日	曜日	調査内容
8	5	土	日本、出発。
	6	日	キューバへの移動。
	7	月	ハバマ旧市街の観察。
	8	火	同上。
	9	水	ハバナ大学訪問、大学教授と情報交換。
	10	木	ハバナからパナマを経てブラジルのリオへ移動。
	11	金	ニテロイ市の古書店で文献調査。 リオのフルミネンセ連邦大学歴史学専攻イルジベルト・カヴァルカンティ教授と情報交換。
	12	土	ホテルでブラジル・アフロ文化研究に関して情報整理。
	13	日	リオのアフロ文化地区モーロデコンセイサン居住のヴァルガス財団カイゾー教授と情報交換。
	14	月	フルミネンセ連邦大学教授であるドミーシオ・プロエンサ／ブラジル文学アカデミー会長と学術交流。ネルソン映画監督と情報交換。
	15	火	都市郊外の漁村観察。
	16	水	リオのフルミネンセ連邦大学歴史学専攻イルジベルト・カヴァルカンティ教授と情報交換。
	17	木	リオのフルミネンセ連邦大学シドニー学長、クラウディオ副学長とブラジル高等教育事情について情報交換。
	18	金	ヴァルガス財団のカイゾー教授の案内で同財団を訪問し、アフロ・ブラジル文化研究の専門家たちと面談。重要な情報を得る。
	19	土	2017年7月にユネスコ世界文化遺産に登録されたヴァロンゴ埠頭のアフロ・ブラジル文化遺跡を観察。同地区居住のヴァルガス財団カイゾー教授宅で情報交換。
	20	日	リオのフルミネンセ連邦大学ニレウ教授たちと学術調査の情報交換。
	21	月	サンパウロ大学に派遣留学中の私のゼミ生とリオ市街の観察。
	22	火	フルミネンセ連邦大学歴史学専攻の教授と情報交換。
	23	水	フルミネンセ連邦大学記録映画制作専攻のアイダ教授とイヴォ教授とブラジル民衆文化事情について情報交換。
	24	木	リオからポルトガルのリスボンへ移動。
	25	金	リスボンからコインブラへ移動。
	26	土	2年間本学でポルトガル語を教えたカタリーナ先生ご夫妻と CPLP について情報交換。
	27	日	植物園で世界の温帯地域の植物を観察。
	28	月	ポルトガルのノーベル文学賞作家サラマーゴ研究者コインブラ大学アルノー教授と CPLP について情報交換。
	29	火	コインブラ大学歴史学専攻のルイス・レイス・トルガル教授とポルトガル歴史文化都市アヴェイロを調査。
	30	水	コインブラからリスボンへ移動。
	31	木	日本大使東閣下と CPLP 本部を訪問し、世界のポルトガル語教育について情報交換。



9	1	金	ポルトガル文化普及機関のカモンイス院を訪問，世界のポルトガル語教育について情報交換。 京都のアズレージョ造形作家の「陰翳と陽光 京都からリスボンへ 石井春展」のオープニングセレモニーに出席。
	2	土	ポルトガルの世界遺産を観察。 歴史地理研究，ポルトガル語研究の情報交換を専門家と行う。
	3	日	ポルトガル歴史都市観察と情報整理。
	4	月	ポルトガルを発ち，帰国の途に。
	5	火	帰国の途に。
	6	水	帰国。

2017年は，大西洋システムにおけるアフロ・ラテンアメリカ文化交流の展開に関する実証研究をCPLP主要国ならびにキューバの研究者と行うための調査であった。2016年と同じく，過去の大西洋圏黒人奴隷貿易に深く関わったポルトガル語圏のブラジルと，その本国ポルトガル，さらに大西洋上の黒人奴隷貿易の拠点であったアフリカのポルトガル語圏やカリブ海諸国のキューバにも視野を広げた。

過去の5年間において，CPLP所属の大国ブラジルの民主主義と社会正義実現の政策の研究を，中道左派のルーラとデイルマの労働者党政権に注目して行った。その結果，黒人低所得者層の初等・中等教育充実の必要性を考えるに至った。

今回の現地調査では，2つの大きな成果があった。

1つは，リオにおいて1811年建設の港湾施設の遺跡で，大西洋奴隷貿易末期に黒人奴隷を受け入れる場所として整備されたヴァロンゴ埠頭の考古遺跡（写真14）が，ユネスコの文化遺産に2017年7月に登録され，この関係者のモニカ・ソウザヴァルガス財団研究員（写真15）との研究協力を約束できたことである。

2つ目は，リスボンのCPLP本部を日本大使東閣下と訪問し，アフリカのカーボベルデ出身のジョルジーナ・メロ事務局長と情報交換並びに今後の研究協力の打ち合わせを行えたことである。

ブラジル史の視座を重視しつつ，過去の黒人奴隷貿易に関わったポルトガル語圏諸国ならびにカリブ海の砂糖生産地域におけるアフロ文化の遺産の今日的意義について考察するため，ブラジル文学アカデミー会長／フルミネンセ連邦大学名誉教授でありブラジルのポルトガル語における



写真14 リオのヴァロンゴ埠頭の考古遺跡を観察



写真15 ヴァルガス財団研究員と研究協力の相談

アフロ文化研究の権威者ドミーシオ・プロエンサ氏を筆頭に、同大学の複数の教授たちと貴重な情報交換を行った。

2017年の現地調査を終えて、今2015年のニカラグア調査を振り返っておきたい。

まず、歴史の背景を確認しておきたい。南米ブラジルの黒人奴隷史は植民地時代から帝政時代まで続くが、4世紀に及ぶ奴隷輸入はおびただしい量にのぼった。つまり、16世紀に約10万人、17世紀に約60万人、18世紀に約130万人、19世紀に約160万人（Revista 1972, 208）であり、このことから、黒人奴隷が当時の生産構造に対して重要な役割を担っていたことが理解できる（住田1976, 298-323）。

一方、16世紀初頭の1502年に、コロンブスの探検隊が中米のカリブ海側、ホンジュラスやニカラグアに到達し、1522年にはヒル・ゴンサレス・ダビラによってニカラグアの探検が行われている。さらに、フランシスコ・エルナンデス・デ・コルドバによってグラナダ（1524年）とレオン（1525年）が建設された。ニカラグアは1573年からグアテマラ総督府によって統治される。グラナダとレオンは、前者が保守派、後者が自由派として争いが絶えなかった（加賀美2009, 20-28）。

ブラジル植民地化の基盤である農業植民が始まり、成長するために有利となる政治・経済情勢は、16世紀末の1580-1640年間のスペインによるポルトガル併合期間に根本的に変化した。併合の期間、オランダがスペインに対して挑んだ戦争は、南米ブラジルに深刻な影響を与えたのである。17世紀初頭、オランダ人は欧州諸国の海上貿易を事実上、すべて支配していた。したがって、オランダ商人の協力なしに、欧州に砂糖を販売することは不可能であった。他方、オランダ人はブラジルの砂糖取引の大きな分け前を決して放棄しようとはしなかった。この砂糖の支配を巡る闘争は、オランダがスペインに対して挑んだ戦争の理由の1つとなった。その1つが25年間にわたるブラジル砂糖生産地帯のオランダ人による占領であった。そして、オランダとポルトガルの強調整体が破綻したことによって、ブラジルにおいてオランダ人が得た砂糖産業の技術面および組織面のすべての知識が、カリブ海地域における大規模な競争的砂糖事業の設立と発展のための基礎となったのである。このときから、それまで四分の三世紀にわたって、ポルトガルの生産者と欧州貿易を支配するオランダ金融グループの間の利害の一致に基礎をおいた独占状態は崩壊したのである。17世紀の第三四半期には、砂糖価格は半分に下落し、次の18世紀全般を通じて、ブラジルの砂糖生産は低い水準に低迷する（フルタード1971, 12-13）。

17世紀におけるブラジルにとってのアメリカ大陸史の主要な出来事は、熱帯産品市場における強力な競争相手の出現であった。これはかなりの程度まで、17世紀前半におけるスペイン軍勢力の弱体化から生じたものである。そしてこの軍勢力の低下は、当時、勢力を伸ばしていた三強国、オランダ、フランス、イギリスによって観察されていた。必要なのは、多数の植民者、つまり、耕作者と兵士であり、この政治的目的のために、小自営農組織に基づかなければならなかった、と歴史家は指摘する。植民者たちは、宣伝や甘言にのせられて集められ、あるいは犯罪者または誘拐された者から徴用された。各植民者には、将来の労働の果実を得るための小さな土地が与えられた（同書, 14-15）。

ポルトガルの農業植民が成功したのは、市場が異常な拡大をみせていた商品の生産を基礎としていたからである。拡大する市場を作り出しうるような商品を見付け出すことが、新しい植民地の関心事であった。しかも、小自営農によって生産しうる商品でなければならない。そうでなけ

れば、欧州人労働力の調達には長続きしなかったであろう。北アメリカ北部地域の植民地は安定した経済基礎を作り出すために、深刻な困難に直面した。しかし、投下資本に引き合う欧州向け輸出の流れを生み出すような商品を見いだせなかった。アンティル諸島の気候条件は、欧州市場において有望な見通しをもったいくつかの産物の生産を可能にした。それは、綿花、藍、コーヒー、タバコなどであった。これらの産物の生産は、小自営農組織と相容れるものであり、植民会社が大きな利益をあげることを可能にした。この間、拡張主義国家のイギリス、フランスの政府は、その軍隊の増大を見守った。大人や子供の誘拐がイギリスで一般的な災難になりつつあった。さまざまな方法により、アンティル諸島の欧州系人口は激増し、バルバドス島だけでも1634年に37,200人に達した。熱帯農業、特にタバコ栽培が商業的成功を取めるにしたがって、欧州系労働者の供給に伴う困難が増大した（同書, 15-18）。

17世紀前半の末期、北東ブラジルにおいてオランダ人の追放が起こり、この外生的要因がアンティル諸島経済の変革をもたらした。砂糖生産技術をマスターし、砂糖産業用設備の製造の準備のできていたオランダ人がこの地域の植民者と協力したのである。オランダ人は必要な設備技術を与えただけでなく、設備や奴隷、土地を購入するための借款も与えた。まもなく、広大な土地を支配し、大規模な製糖工場を所有する強大な金融グループが形成された。そして、ブラジルからのオランダ人追放後10年もたたないうちに、アンティル諸島にはまったく新しい設備をもち、より有利な地理的位置を利用した大規模な砂糖経済が運営されたのである。結果として、仏領および英領アンティル諸島ともに、欧州系人口が急減する一方、アフリカ人奴隷の数が急増した。たとえば、バルバドスでは、白人人口は半減したのに対して、黒人人口は、20年間に10倍以上になった（同書, 19-20）。

かくして、仏領および英領アンティル諸島から西に位置するニカラグア・大西洋岸においては、17世紀から18世紀にかけて、イギリス人による植民が行われ、彼らによって黒人奴隷が導入されることになったのである。

そして今回、ブラジルのリオデジャネイロにおいて1811年に建設された港湾施設の遺跡が、大西洋奴隷貿易末期に黒人奴隷を受け入れたヴァロンゴ埠頭の考古遺跡としてユネスコの世界遺産に2017年7月に登録された（写真16, 17, 18, 19, 20）ことを、今後の「大西洋システムにおけるアフロ・ラテンアメリカ研究」の重要な視座としたい。この登録についてヴァルガス財団の共同研究者は「黒人文化受入れについての新時代の始まりだ」と誇りを持って私に語ってくれた。帝政期1843年に皇女埠頭改築のため地中に隠れていた「黒人」埠頭の跡地が、2011年の「麗しの港」（Porto Maravilha）造成工事によって再発見されたのである。



写真 16 遺跡のユネスコ登録証明の観光スポット壁面のリオ市の案内



写真 17 遺跡の案内板



写真 18 左手が皇女の埠頭遺跡, 右の奥がヴァロンゴ埠頭の遺跡



写真 19 右の奥がヴァロンゴ埠頭の遺跡



写真 20 西側から眺めたヴァロンゴ埠頭遺跡

## おわりに

2015年からの3年間、過去の植民地支配者からの黒人奴隷に対するまなごしを超えて、所謂ディアスポラとして大西洋世界に拡散したアフリカの文化遺産の視座を重視する姿勢からの考察に至った。調査の日程が示しているように、南米のブラジルを基本としながら、大西洋システムのスペイン語圏キューバとニカラグアに視野を拡大して考察を行った。

今回の成果は、2017年における3度目の調査において、最大のアフロ・ラテンアメリカ遺産に出会ったことである。それはブラジルのリオ北地区というサンバ発祥の地における黒人奴隷到着



の遺産である。見事な歴史建造物の跡地ではなく、奴隷たちの墓地であった場所に対する意味づけであった。

今後の展望としては、このディアスポラとして大西洋世界に拡散したアフリカの文化遺産の視座を発展させる予定である。

## 謝辞

本研究は、2015年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金「ニカラグアの考古学及び文献学資料評価と発展への応用—アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ—」の研究分担者として助成を受けました。さらに2016年度並びに2017年度の京都外国語大学学内研究員の研究代表者として助成を受けたことに対し、謝意を表します。

## 参考文献

Gilroy, Paul

2012 *O Atlântico negro: modernidade e dupla consciência* / tradução de Cid Knipel Moreira. São Paulo: Editora 34.

Guimarães, Roberto Sampaio

2014 *A utopia de pequena África: projetos urbanísticos, patrimônicos e conflitos na Zona Portuária carioca* / Roberto Sampaio Guimarães. Rio de Janeiro: Editora FGV.

*Revista de História*

1972 n. 89, Universidade de São Paulo.

“Los afro-nicaragüenses (creoles)”

1986 WANI, Managua, Nicaragua.

Mercedes Mauleón Isla

2008 *La población de Nicaragua: 1748-1867*. Colección Cultural de Centro América.

ORINOCO:

1999 *Revitalización Cultural del Pueblo Garífuna de la Costa Caribe Nicaragüense*. Universidade de las Regiones Autónomas de la Costa Caribe Nicaragüense URACCAN, Managua, Nicaragua.

加賀美允洋

2009 『貧困国への援助再考—ニカラグア草の根援助からの教訓』 アジア経済研究所。

金七紀男・住田育法・高橋都彦・富野幹雄

2000 『ブラジル研究入門—知られざる大国500年の軌跡』 晃洋書房。

住田育法

1976 「ブラジル奴隷解放の歴史的意義」『経済学論叢』第24巻第1・2・3号。

田中高編

2004 『エルサルバドル，ホンジュラス，ニカラグアを知るために』明石書店。

富野幹雄・住田育法

2002 「ブラジル学への招待」『ブラジル学を学ぶ人のために』世界思想社。

C. フルタード（水野一訳）

1971 『ブラジル経済の形成と発展』新世界社。





# BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos  
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos  
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

## 2017

### <ARTÍCULOS>

Mestizos, *niseis*, y náufragos:

la continuidad de la presencia japonesa en Filipinas, 1650-1766

..... José Ángel del Barrio Muñoz 1

Los problemas y límites de autonomía en los municipios indígenas en los Altos de Chiapas

..... Munehiro Kobayashi 31

### <NOTAS DE INVESTIGACIÓN>

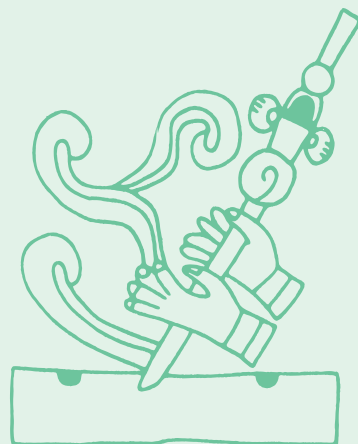
Positioning the Creoles within the "American-Mediterranean Regions" :

Racial Identity and Land Demarcation in Bluefields, Nicaragua

..... Kay Aoki 57

Relatório da Pesquisa da Cultura Afro-Latino-Americana sobre o Sistema Atlântico

..... Ikunori Sumida 75



Vol.

# 17